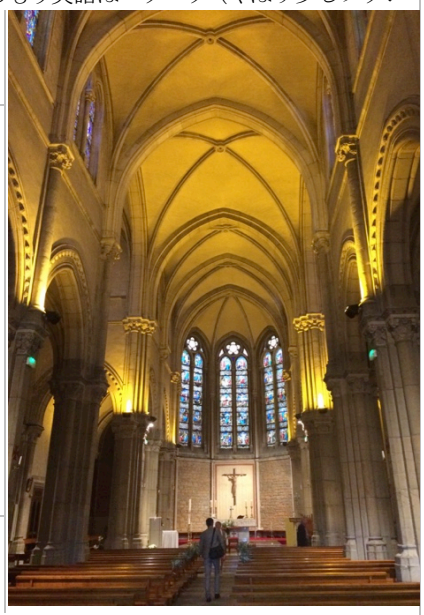
習ってよかったをすべての人へ　Issued by Learning Studio Azamino　2017年5月1日 発行　第46号

# 月刊 語学のススメ新聞 5月号

## Hello!! from the UK!!～Chiko's column～

みなさん、こんにちは！いかがお過ごしでしょうか。日本はかなり気候が夏に近づいているのではないでしょうか。こちらは一旦春を感じさせるように、暖かくなりましたが、また冬に逆戻りのような寒さが続いていました。が、ようやく昨日から暖かくなり春を通り越し、初夏のような気候になってきているような気がします！日も長くなってきて、夜8時半ぐらいまで明るくなってきたので、気分も少し明るくなってきました、笑。

さて、最近の出来事といえば、先週末にフランスのリヨンに３泊４日で行ってまいりました。というのは、このコラムにも、何回か初めの方に登場したフランス人のMarie の結婚式に出席してきました。彼女は私がオーストラリアに住んでいた頃のルームメイトでとっても仲良くなりました。長い時を経ても、今までずっと連絡を取り合ってきた、私の中ではとっても大切な親友の一人です。彼女がついに結婚式を挙げることになり、フランスまで駆けつけて出席してきました。彼女と私は、オーストラリアのメルボルンで一緒に住み、同い歳、さらに、同じ大学で（当初は違う学部でしたが、後者は同じで大学院に通っていました）毎日一緒に大学に行き、レポートの前は大学のパソコン室に一緒に通い、夜通し頑張っていました。週末には、パブや、いろんなレストランに一緒にいき、平日は一緒にご飯を作ったりと、本当に衣食住を共にしてきた戦友です。１年ほど一緒に住み、私は途中で大学院を中退し日本に帰ることになってしまいましたが、彼女は本当によく頑張り、大学院を卒業し、メルボルンで働き、そしてシドニーに移りとても素晴らしい職につき、現在に至ります。日本に帰ってからも、スカイプで話したり、何かあるといつも連絡を取り合ってきました。彼女は、幼少時代ご両親の仕事の関係で、レバノンやドバイなどミドルイーストで育ってきました。インターナショナルスクールに通っていた彼女は、オーストラリアに来た頃からもう英語はペラペラ（やはり少しフランス訛りですが、笑）、全く授業についていけず、落ち込んでいる私をいつも励まし、どこか抜けている私の面倒を見てくれました。彼女も私と同様、本当に飲むことと、食べることが大好きで、さらにミドルイーストの料理にもかなり詳しかったので、よくレバノンのレストランに二人で出かけました。彼女のおかげで、たくさんの料理に出会い、新しい味に出会い、私の味覚や興味がさらに広がりました。そんなこんなで、とっても仲良くなったMarie ですが、彼女は、シドニーに移り、彼女がやりたかった仕事につき（イベントオーガナイザー）、今回結婚したPaul に出会いました。Paul はパース出身の銀行マン！とっても頭がキレるナイスガイです！そして彼らは４年前に婚約し、やっと今回結婚式を挙げることとなりました。かれこれ１年ほど前からこの結婚式は決めっており、私も招待されていたのですが、１年前は日本から参加するつもりでした。それが、今イギリスにいるので、本当に簡単にフランスまで移動することができ本当にナイスタイミングでラッキーでした！



さて、フランスリヨン出身のMarie は、今回そこで式を挙げることを決めたわけですが、とってもフランス伝統的な（彼女いわく、笑）式でとても温かい、素晴らしい式でした。結婚式は、まず教会で行われ、その後パーティー会場に移るという形式でした。２年前、イタリアのシシリア島でのジュリオの結婚式もそんな感じでした。（昨年のコラムを是非ご参照くださいませ！）ヨーロッパの式はこのような形式のようです。そして、教会では、賛美歌か、牧師様のお説教、そして誓いの言葉、そして何か聖水（？）のようなものをかけてもらったりして、式が進められました。

パイプオルガンと賛美歌は本当に素敵で、教会中に響き渡り、しんみりしてしまいました。そして、そこでの式が終わると、教会から出てくる二人にをお祝いして二人がとってもレトロな車に乗ってパーティー会場に向かうのをお見送りします。皆さんも、想像できると思うのですが、新郎新婦が教会から出でくるとき、何か紙吹雪みたいなものを投げて、お祝いしますよね？Marie の結婚式では、みんなラベンダーの乾燥したものを手に持ち（配られ）、それを二人に投げて、お祝いしました。ラベンダーがふわっと香り、なんだか香りでもハッピーな気分になれました！

それから、パーティー会場にそれぞれ向かいます。今回のパーティーはとっても素敵なシャトー（ワイナリーの跡地）にあるパーティー会場で行われました。覚悟はしていましたが、この時点でもう７時、さてすぐにディナーというわけには、もちろん行かず、まず、アペリティフという時間を楽しみます。立食で、食前酒シャンパン等を飲みながら、フィンガーフードを食べ、みんなとおしゃべりをする時間です。そこでは、彼女の地元の友達とたくさん話すことができ（中にはフランス語しか話せない人もいましたが、お酒が入ればなんのその♪）Marie の歴史を少し垣間見ることができました。まぁ、この時間も１時間ぐらいかなと思いきや、それは甘い考えでした。そのアペリティフは２時間半ぐらい続き、もう足もヒールでクタクタだし、少しお酒も入りいい気持ちになって来たので、そろそろ座らせてー！！！と思った矢先、やっとディナー会場への移動となりました！！　この後ディナー会場のお話に移りたいと思いますが、それは来月号で！！

そんなこんなでフランスから帰り、また現実に向き合い、卒論の準備に追われているChiko です！では、来月号で！Chiko

# 元気が出る‼　今月のおすすめの一冊。

**今月のおすすめの一冊**

私たちが 学校で教わった日本語は、間違っています! 明治以来の間違った文法解釈が正されていないため、本来日本語がもつ美しい特徴を、私たちは知らずにいるのです。本書は「あいさつ」「名前」などの身近な切り口から、世界に誇るべき日本語の本当の姿を明らかにしていく画期的な書です。

みなさんこんにちは、小林です。ゴルデンウィークを思い切り楽しんだ後は、気分を切り替えて学習にも取り組めますね！ そんなみなさんに楽しんでいただける本を…と思い、名物店長清水克衛さんの「読書のすすめ」に行ってきました。早速店長さんに声をかけたところ、「これなんかいいですよ～」とかるーい感じでオススメされたのが、**金谷武洋著『日本語が世界を平和にするこれだけの理由』**です。金谷さんはカナダの大学で 25 年間日本語を教えてきた気鋭の日本語学者。読んでみたら、ス・ゴ・イ!! 経験に裏打ちされた、鋭い視点からの洞察!! 以下印象に残ったところを中心にまとめてみます。

海外からとても教育熱心で優秀な民族と思われている日本人が、なぜ学校で 10 年以上も英語を学ぶのに、それでも苦手なのか? 第 1 に、それは日本語と英語が何から何まで正反対であること。第 2 に、母国語である日本語を日本人自身が分かっていないこと。この 2 つがわかれば、英語習得に大きく役立つはずです。

まずは、「ありがとう」と「Thank you」の違いについて。そもそも「ありがとう」とは「有難う」のことで、「有ることが難しい」→「なかなかないことだ」→「(こんな体験は)滅多にないことなのに(それをわざわざして下さって)ありがとう」と意味が広がりました。それに対して英語の Thank you は、元は I thank you。直訳すれば、「私はあなたに感謝します」という意味です。I は省略されてなくなりましたが、動詞の thank(感謝する)の相手の You は残りました。比較すると、日本語の「ありがとう」には人が 1 人も出て来ないのに、英語では聞き手の「あなた(You)」だけでなく、話し手の「私(I)」も昔はいたのです。また別の角度から見れば、英語の Thank you は動詞が出てくるため、「誰かが何かをする言葉」で有るのに対して、日本語のありがとうは「何らかの状態である言葉」と言えます。同様に、「おはよう」と「Good morning」の違いです。まず「おはよう」は、「お早い」→「お早く」→「おはよう」と変化しました。「ありがとう」と同様に行為を示す動詞文ではなく、「状況・様子」を表す形容詞文です。もちろん「話し手」も「聞き手」も出て来ないばかりか、この 2 人は、お互いに向き合ってさえいないのです。この表現ができた時代を推測すれば、その場所はおそらく外。まだ太陽が上がりきらずに地平線に顔を出した様子を 2 人が並んで見ています。そして「まだ朝早い」という状況に 2 人が心をふるわせて、「こんなに早いんですねぇ」と**「共感」**しているのです。これに対して「Good morning」の元々の表現は「I wish you good morning」で、話し手の私が、聞き手のあなたにとって、この朝が良いものであるように祈る、という積極的行為を表現した文が元になっています。「ありがとう」も「おはよう」も日本語の方は、そこにいる話し手と聞き手の 2 人は、同じ方向を向いて「視線を溶け合わせ」ながら、一緒に感動、共感しているだけなので、文には人間が出てきません。つまり、英語の文には人間が出てくるのに、日本語の方には出てこない。これこそ英語と日本語の一番大きな違いです。このことは人名・地名にもはっきり現れています。例えばカナダの地名は元々が人名、それに対して日本の場合は地名が人名となっています。舞台に例えるならば、英語はそれを演じる役者に注目するのに、日本語は人間よりもその周りの舞台や背景に注目する、つまり英語は「人間」に注目するが、日本語は「場所」に注目するという事です。もしそうなら、同じ状況でも、日本語と英語では全く違った角度から捉えていると言えます。さらに違いは、声と視線にも及びます。日本語の音声は 125～1500Hz、それに対して英語は 2000～15000Hz とかけ離れているため、日本人が英語を話す際には、舞台俳優かオペラ歌手になったつもりで、頭のてっぺんから出さないと遠くへ届く音を出せません。また多くの日本人が「相手の目を見て話すこと」を失礼と思いますが、逆に「相手の目を見て話さない」人を失礼と考える西洋人とは正反対です。また敬意を表す際、日本人は体を折って「お辞儀」しますが、西洋人なら相手を直視したまま「オレがここにいるぜ!」と言わんばかりに胸を反らして顎を突き上げ、大股で近づいていきます。全くもって正反対です。

そして最も大切なポイント、「基本文の組み立て」の違いについて触れていきます。カナダ人の学生が日本語で作文をすると、多くが人称代名詞を使いすぎるそうです。

「もうあなたは花子さんと話しましたか」「はい、私は彼女と話しました」

でも日本人ならこんな不自然な言い方はしませんね。

「もう~~あなたは~~花子さんと話しましたか」「はい、~~私は彼女と~~話しました」

こんな日本語がもっと自然です。さらに愛の告白なら、「私は、あなたを、愛しています!」なんてフツー言いません。英語の I love you.(略していったとしても、Love you.です)、フランス語の Je t'aime.にあたる日本文では、次のような表現が一番自然です。

「好きだよ」(男性の場合、多くの場合、相手の方を見るでもなく、また聞こえないような小さな声で言う)

では、なぜ日本語では人称代名詞が要らないのでしょう。分かっていることは言わないし、言わないほうがいいからです。でもそうなると次は、「お互いに状況は分かっているのに、どうして英語やフランス語では必ず代名詞を使うのか?」と言う疑問が出てきます。それは「動詞活用」があるためで、動詞の形を決めなければ文が作れないし、動詞の活用を決めたと同時に主語が決まるわけです。例えば「食べます」のような簡単な日本語表現が、そのままでは仏訳できず、フランス語では、Je mange, Tu manges, Il/Elle mange, Nous mangeons, Vous mangez, Ils/Elles mangent. と主語(である人称代名詞)によって様々な使い分けをしなくてはなりません。さらに英仏語の文には目的語も必要です。また「はい、見ました」の英文は「Yes, I saw」だけではダメで、最後に「HER」をつけて「Yes, I saw her.」と言わなければ正しくありません。……次号に続く(まとめ 小林義和)

**今月のおすすめの一冊**

**『日本を語ろう -Let's Talk About Japan (3 分間スピーチ例文集 -A Collection Of Three Minute Speeches) 』**ビジネスマンや留学生が国際舞台で自国のことを語れない、よく聞く話です。この本は、日本のエッセンスを 3 分強で語るための例文集。「これぞ日本! 」という 16 テーマが、英語対訳付きで簡潔にまとめられています。

## What is "Shun"？

他の国の方々も旬の野菜、 Vegetables in season を食べると思いますが、日本人は旬にとてもこだわる人種だと思います。新じゃが、新玉ねぎ、新ごぼう、筍、山ウド、たらの芽等等、美味しいですよね～。英語圏の方々が日本の旬の食べ物について多くのブログを書いていたりしますが、この『旬』にぴったり来る一言の英単語がないようなのです。一人の方が、この『旬』をこう表していました。"the exact moment that a vegetable is at its very best, a fruit at its most succulently sweet (水分が多く甘い), fish at its most flavorful. (SAVORY JAPAN) 個人的に魚に関しては、「脂が乗って」と言う Fatty を付け加えたいです。「xxxx は今、旬です。」と言いたい時は "xxxx is at its very best now." とかでも伝わりそうですね。

ちなみに筍は英語で Bamboo Shoot, 新ごぼうは Burdock Root、たらの芽は Fatsia Sprouts, 山ウドは Aralia Cordata（学名）です。 たらの芽も山ウドも元々はアジアの野菜だし、北米等ではほとんど見ないので単語を言っても知らない人が多いかもしれません。山ウドは形的には Japanese Asparagus と言ったほうが通じるかもしれませんね。 Sprout は芽と言う意味、Root は根っこ、春の野菜には幹や茎 Stem を食べる物も多いです。Shoot は「撃つ」と言う意味もありますが、「芽が出る」という意味もあるようです。ちなみに灰汁を取る、get rid of harshness は the harsh taste や the bitterness と言っても良いです。アク抜きに米ぬか使ったりしますが英語では Rice Bran です。それでは夏の野菜が出てくるまで旬の物を楽しみましょう！ Rie